

昔むかし、ある寂しいお城に、貴族とその妻が住んでいました。あるとき、夫婦は、長い旅に出かけました。お城には、お手伝いの娘と、子犬がいつぴき残りました。

お城は、人里離れた所に建っていたので、だれにも人に会わない日がよくありました。けれども、娘は、子犬と楽しく留守番をしていました。

ある晩のこと、娘は、子犬にいました。

「わたしたち、ふたりつきりね。今夜は、ホットケーキを焼いて食べましょうね」
そのとき、戸棚の下から、男の声がしました。

「ちがうぞ。おまえらふたりきりじゃない。おれもいるぞ」

娘は、びつくりぎょうてんしました。けれども、すぐに落ち着いて、親切そうにいいました。

「あら、そう。じゃあ、あなたもいっしょにホットケーキを食べましょうよ」
すると、戸棚の下から、ひとりのどろぼうがはい出して来ました。そして、みんないっしょにホットケーキを食べました。

どろぼうは、食事が終わるといいました。

「おれは、たつぷり盗んでやろうと思つて、この城にしのびこんだのさ。おまえが手を貸してくれたら、すべてうまくいくんだがなあ。もし手を貸してくれなければ、ひねり殺してやる」

娘は、

「まあ。喜んで手を貸しますわ。だって、ここの主人は、ひどい人なんですもの。何度逃げ出そうとしたか、知れやしない」と答えました。

ふたりは、お城じゅうをくまなく探しまわつて、ありったけのお金と、金銀、宝石を集めました。いくつものふくろが、宝でいっぱいになりました。どろぼうは、

「さあ、ふくろをよくしばらなきゃならないぞ。おまえ、ひもを持っていないか」と、娘にききました。娘は答えました。

「ひもですって。ああ、そうだ。ひもなら庭の東屋（あずまや）にたくさんぶらさがつてゐるわ。あなたが取りに行つてくだされば、そのあいだに、わたし、もっとお金を探しておくわ」

どろぼうは、庭に出て行きました。そして、東屋からひもを持ってもどつてみると、屋敷のとびらには、がっちりかぎがかかっていました。どろぼうは、入ることができません。どんなにどなったり、のろつたりしても、娘はとびらを開けませんでした。どろぼうは、ついにあきらめて帰つて行きました。

けれども、娘は、これでおしまいになると思つていませんでした。大きなおのを持つて、どろぼうがやつて来るのを待ち受けました。

夜中になると、どろぼうは、仲間を六人引き連れてもどつてきました。そして、屋敷のとびらの敷居の下を掘りはじめました。穴が、人間が通れるほどの大きさになると、どろぼうのひとりが、穴からはいこんで、うちの中にもぐりこもうとしました。

娘は、おのをふり下ろして、一撃で、どろぼうの首を切り落としました。

残りのどろぼうたちは、仲間が先へ進まないの、引つ張り出して見ると、首がないのでびつくりしました。それでも、つぎのどろぼうが穴にはいこみました。その男も、一撃で首を切られてしまいました。三人目が、やつてみました。こんどは、娘がおのを

ふり下ろすのが早すぎました。それで、頭のとっぺんをけずりとただけでした。三人目のどろぼうは、

「引きもどしてくれ！」とさげびました。みんなは、あわてて仲間を引きもどしました。どろぼうたちは、すっかり勇気をなくして、帰って行きました。娘は、切り落としたふたつの頭を、勝利のしるしに戸棚の上に飾りました。

やがて、お城の主人夫婦が、旅から帰って来ました。そして、娘が、勇敢にも、どろぼうから財産を守ってくれたことを聞いて、感心しました。主人は、ほうびとして、娘に、たくさんのお金をくれました。娘はそのお金を持って、美しい家に引っ越し、ひとりで暮らし始めました。じきに、たくさんのお金が、娘のところにやってくる、結婚を申しこむようになりました。けれども、娘は、だれとも結婚しようとしませんでした。あるとき、りっぱな若者が、馬車に乗ってたずねてきました。娘は、たちまちこの若者が好きになりました。

ある日のこと、若者が、

「いつしよに、馬車で出かけないか」とさそいました。娘は、いわれるままに、若者のとなりに腰を下ろしました。馬車は走りだしました。娘は、

「どこに行くの」とたずねましたが、若者は答えないで、どんどん馬車を走らせました。やがて、夜になりました。若者は、馬車を走らせながら、歌いました。

月がこうこうと照る夜に

わが愛する馬よ走れ、速く！

「美しい娘さん、あんたは後悔していないかい」

娘は、答えました。

「いいえ。どうしてわたしが後悔するっていうの。それくらいなら、いつしよに来なかったわ。もうすぐ着くのかしら」

「もうあと、ほんのひとつ走りだよ」

しばらく走っていくうちに、若者の帽子が風で飛ばされました。すると、若者の頭のとっぺんに、小さなふたの形をした銀の板が載っているのが見えました。娘は、考えこみました。

（この人は、以前に、頭のとっぺんをおので切り取った、あのどろぼうにちがいない）
若者は、帽子をかぶり直して、また歌いました。

月がこうこうと照る夜に

わが愛する馬よ走れ、速く！

「美しい娘さん、あんたは後悔していないかい」

娘は、答えました。

「いいえ。どうしてわたしが後悔するっていうの。それくらいなら、いつしよに来なかったわ。もうすぐ着くのかしら」

「もうあと、ほんのひとつ走りだよ」

とうとう、馬車は、森の中にたった一軒ひっそりと建っている大きな家に着きました。

「さあ、着いたぞ」

若者は、娘を家の中に連れて入り、二階に連れて行きました。そこには、たくさん部屋が、初めのドアを開けました。その部屋は、壁掛けも飾りも、みんな金と銀ででき

「部屋の中をよく見てごらん」といって、娘を残して行ってしまいました。娘は、初めのドアを開けました。その部屋は、壁掛けも飾りも、みんな金と銀ででき

ていました。二番目の部屋は、美しい服がたくさんかけてありました。三番目の部屋は、刀やナイフ、鉄砲などが、上から下までぶら下がっていました。娘はつぎつぎにドアを開けて部屋を見て行きました。ある部屋まで来ると、だんろに火が勢いよく燃えていて、大きなべがかかっていました。なべの中で、油がにえたぎっていました。つぎの部屋では、ひとりのおばあさんが、こしを下ろして、臓物をより分けていました。おばあさんはいいました。

「こんなところに来て、あんたは後悔するかもしれないよ。近いうちに、わたしがあなたの臓物をより分け、あなたの肉は、あの大きなべの油であげられるかもしれないからね」

娘は何もいわず、先へ行きました。しまいに、大きな部屋にやって来ました。そこには、窓が十五あつて、そのうちの十四の窓に、死体がぶら下げられていました。娘は、十五番目の窓の前に立って考えました。

「ここが、わたしの場所になるのかしら」

娘は、すぐさま窓を押しあげて、外へ飛び出しました。娘は、水をたたえた堀の中に落ちました。けれども、すぐに、向こう岸に泳ぎ着きました。そして、いちもくさんに走りだしました。

じきに、遠くのほうに、干し草を高く積み上げた荷馬車を見つけました。娘は走って行つて、お百姓に、

「干し草の中にかくしてください」とたのみました。お百姓は、

「よろこんでかくしてあげたいが、どうすればいいかな」といいました。娘はいいました。

「まず、干し草をぜんぶ下ろして、荷馬車の底に板を一枚横たえてください。わたしはその下にかくれますから。それから、その上にまた、干し草を積み上げてください」

お百姓は、大急ぎで干し草を下ろし、板の下に娘をかくすと、また干し草を積みました。そして、すました顔で、荷馬車を進めていきました。

しばらくすると、三人の男が、追いかけてきました。男たちは、みなキラキラ光るサーベルをにぎっていました。

「おい、娘がひとり、走っていくのを見なかったか」と、男たちはたずねました。

「いや。見なかったね」

「干し草の山の中に、かくしているんじゃないだろうな」

「いや。かくしてなんぞいないよ」

「では、サーベルでついてみていいか」

「ああ、もちろんいいとも」

男たちは、サーベルで、干し草の山をつきました。けれども、なんとついてみても、サーベルが板に当たるので、男たちは、それが荷馬車の底だと思いました。とうとう、男たちは、あきらめて帰って行きました。

お百姓は、干し草を自分のうちに運んでから、娘を家に送ってやりました。娘は、お百姓に、たつぷりお礼をしました。それからのち、娘は二度と銀の板を頭に乘せたどろぼうに、会いませんでしたとき。

おしまい。